

〈研究ノート〉

## 競争の社会的最適化に関する一考察

山田 玲 良

### 1. はじめに

現代において標準的とされる経済理論は、競争が一定の条件を満たして完全に行われるとき、経済に効率性がもたらされると考える。完全競争の条件を満たすことは容易でなく、市場はしばしば失敗するが、それでも、競争なくして経済効率の達成なし、との基本的な信念が揺らぐことはない。

しかし、生き馬の目を抜く、と評されるほどに、市場における競争は時に苛烈をきわめる。例えば、需要側にとって、目当ての財・サービスを得ることが死活問題である（と感じられる）状況では、他の一切を犠牲にして競争に挑むが、争いに敗れて購入権を逃せば、全てを犠牲にしただけの結果が残る。「他の一切を犠牲にしたこと」が、競争に敗れた者にとって悔やまれることであるのはもちろんであるが、競争に勝利した者にとっても、そこまでの犠牲を払わずに済めば、それに越したことはあるまい。

このことについて、この需要競争の場合には、需要側の競争が供給者側の厚生を高めることにより、競争の公益性が担保されると言われる。この主張の前提には、社会厚生上、需要側の厚生低下が供給者側の厚生上昇によって代替可能であるとの理解がある。しかし、需要側の厚生低下の影響が当面のものにとどまらず中長期にわたるのに対し、供給側の厚生上昇の利益が当面のものにとどまる場合、さらには、需要側の厚生低下が中長期的には供給側の不利益にもつながる場合には、上述の主張は通用しなくなる。そして、この問題が需要競争に限らず、供給側の競争についても指摘できることは、言うまでもない。

本稿では、入学試験を題材に、こうした死活的な競争のあり様を描写する。職業の選択がどの大学の出身であるかによって制約される学歴社会では、世評の高い大学への入学をめぐる受験競争が激しくなる。どの受験生も合格確実圏を目指し、一点でも多く得点を伸ばす努力を積み重ねるが、互いの努力が合格水準を更に高める循環を生じる結果、受験生

は際限なく努力を続けるよう求められる。この「無限競争」は短期的には受験生にとってのコストであるが、中長期的には、学力の上昇をもって受験生の厚生に資するとされる。しかし、ここで向上する「学力」が社会の求める学力から乖離するものであれば、その上昇は中長期的にも受験生に利益をもたらすとは言えない。社会にとっても、本物の学力を受験生に身につけてもらう貴重な時間が無駄に費やされたということになる。受験競争の構図のスケッチを通して、競争の苛烈さが競争主体と社会にもたらし得る弊害の深刻さや、その大きさを明らかにし、競争によって社会的な最適解を実現するためにも、競争の抑制が求められる可能性について、試論的考察を行うことが本稿の目的である。

本稿が考察の対象とする消耗戦の構図は第2節で描き、その含意を第3節で検討する。第4節では、本稿の考察が他の経済環境にもあてはまることを論じた上で、今後の研究の方向性を明らかにする。

## 2. 消耗戦の構図

本稿では消耗戦の題材として、競争的な大学入試を取りあげる。構図を簡明に示すため、受験者甲と乙の2人が、1人分の合格枠をめぐる競い合う、最小単位のモデルを考える。甲と乙の実現可能な学力は同等とし、実現の度合いは各人の努力の増加関数とする。実現可能な学力が同等であるということは、各人が最大限の努力を傾注した時に実現する学力が等しいことを意味する。合格は、より高い学力を実現した受験者が勝ち得るものとし、甲と乙が実現した学力が同じときは、両者が50%の確率で合格する。

甲と乙の努力には機会費用が発生するが、その費用は無視できるものと仮定する。この捨象性は、機会費用自体が低い場合のほか<sup>1</sup>、合格が甲や乙にもたらす利得が排他的に重要である場合に発揮される。競争的な大学入試のケースは、後者に該当すると考えられる<sup>2</sup>。

このような消耗戦の構図では、甲も乙も、受験の準備に最大限の努力を傾注し、各自実現した同等の学力をもって、合格の可能性を等しく分け合う（50%の確率で合格する）ことになる。仮に甲か乙、あるいは両者ともに、受験準備以外にも努力を傾けたい成長プロセス（読書やスポーツなど）があったとしても、そちらにも努力を割いてしまえば、相手を上回るか、少なくとも下回らない学力を実現する機会を逸する。このことは、他のい

1 機会費用が低くなる現象は、他に有望な資源の投入先が見当たらない場合のほか、当該の経済主体が保有する資源について、一般通用性が損なわれている場合に起きると考えられる。例えば、一つの企業に長く雇用されることによって、他の企業においても通用する汎用的な能力よりも、その企業内においてのみ発揮される企業特長的な能力を肥大させてしまった労働者が転職しにくくなるケースなどがそれに該当する。

2 金（2019）が論じるように、いわゆる学歴社会においては、よりよい進学のための受験準備に青少年期の成長に資する多くの機会費用がかけられることが知られている。

かなる目標にも優先される大学入試において合格を危うくする行いであり、相手との競争のなかで、そうした行動を自ら抑制していくことになる<sup>3</sup>。

### 3. 含意

この消耗戦における唯一の均衡、すなわち、甲と乙が共に受験の準備に最大限の努力を傾注し、各自実現した同等の学力をもって、合格の可能性を等しく分け合う（50%の確率で合格する）ことになる状況は、甲と乙に受験勉強以外の成長プロセスに取り組む行動を抑制させ、甲と乙の内なる人的資本の形成に大きな影響を及ぼす。その結果、甲と乙に培われる人的資本が社会的に最適なものにならなければ、それは社会に（質的な）資本不足をもたらすとともに、社会からの評価によって成り立つ甲や乙の将来を結果的に（当面の入試に合格したとしても）危うくすることになりかねない。こうした状況を改善し、社会的に最適な状態に近づけていくためには、大学入試の内容を社会が将来にわたり求め続ける人的資本の基礎を高校までに形成することを促すものに改めていか、大学入試において競争的に選考される部分を限定し、大学入試に全ての努力を傾注する必要をなくすなどの方策が考えられる。

このうち、前者が実現すれば、確かに《大学入試のための学力の伸長＝社会的に求められる人的資本の基盤形成》の図式が成立する。しかし、そもそも「社会が将来にわたり求め続ける人的資本」の内容を明らかにし、さらに、その伸長を的確に測定する試験問題を作成できるかどうかという、実現可能性の問題が残る。これに対し、後者が実現すれば、バランスの取れた人的資本形成の機会を受験者に保障することができる<sup>4</sup>。この場合、個人の人的資本形成への公的な関与が弱まるため、人的資本の形成を社会計画的に推進することは難しくなるかもしれない。しかし、内なる人的資本を主体的に形成する機会を保障された個人が、個人的な興味関心に即しつつも、社会的な要請をふまえて不断に創意工夫を凝らしていくようになれば、個人において人的資本のフォーマットを更新する力が養われる。これは、社会においても、将来の環境変化に柔軟に対応する資源が蓄えられることに他ならない。そして、このタイプの社会的最適化には、大学入試における競争の制限が不可欠であることが、本稿が描写する消耗戦の構図より読み取れる。

3 これと類似の現象は、超過利潤の分捕り合戦として捉えられるレントシーキングなどにみられる。Wenders (1987) は、レントシーキングのプロセスの中で、レント（超過利潤）が費消されていく様を克明に分析している。

4 経済の領域では、この種の解決策が一部の産業に導入されている。例えば、銀行に対して国際的に課される自己資本比率の規制は、銀行同士が過当競争に陥り、経営の体力を失って信用不安を招くことがないように整備されたものであるが、これは、競争によって生じ得る社会状態の歪みを競争に投入する資源を抑制させることによって予防する取り組みとみることができる。

#### 4. おわりに

本稿は大学入試を題材として、死活的な競争が社会的にも致命的な厚生損失をもたらす可能性を考察し、その損失を事前に回避するために競争を制限することの有効性について検討した。こうした死活的な競争がもたらす弊害は、従来、競争社会に広くみられるものであったが、近年はその規模が膨らんでいるようだ。例えば、日本の基幹産業では、主要企業が（海外の）新興企業との競争に敗れ、実質的に破綻する形で市場からの退出を余儀なくされるケースもみられるようになった。有力企業がこうした窮地に追い込まれるのは、有力である間も「他の一切を犠牲にする競争」の中で、新たな技術革新や事業分野の転換に挑む体力を削られていくことが一因になっていると考えられる。大学入試をめぐる問題でいえば、読書など、学力の土壌を豊かにする余裕、誘因が受験生から奪われることが、それに相当する。

問題は、こうした消耗戦に巻き込まれる前に、それを回避する選択がなぜなされないか、あるいは、なされにくいのか、ということである。消耗戦に関する先行研究では、複数の均衡をもつゲームが多く分析され、消耗的な競争を最初から回避する均衡についても研究が進んでいる<sup>5</sup>。大学入試においては、大学に進学しない選択の期待利得を極小化する学歴社会のシステムが、死活的な競争への参加を必然のものとしているが、競争を回避する選択肢をとらない機会費用が当面低くなってしまふ現象が一般にもみられるのであれば、どのような条件の下でそのような状況が生じるのか。それを明らかにできれば、社会的な最適解を得るために競争を制限しなければならない経済環境や制限の方法を特定していけよう。稿を改めて、更に考察を進めることにしたい。

#### 5. 参考文献

- Myatt, David P. (2005), “Instant Exit from the Asymmetric War of Attrition,” Oxford University Department of Economics Discussion Paper Series, 160, 1-38,
- Wenders, J.T. (1987) : “On Perfect Rent Dissipation,” American Economic Review, 77 (3), 456- 59.
- 金敬哲 (2019) 『韓国 行き過ぎた資本主義 「無限競争社会」の苦悩』講談社現代新書

---

5 例えば、Myatt (2005) を参照。